

# 余市町でおこったこんな話

## 余市町でおこったこんな話その159

余市町の埋もれた歴史等を紹介し、改めて余市町を再認識するコーナーです。

### ソーラン節

ヤーレンソーランのかけ声でお馴染みの「ソーラン節」は、沖揚げ音頭と呼ばれる、ニシン定置網漁の作業唄のひとつです。十数人が乗り込んで力をあわせて船を漕ぐ、向かい合った2艘の船の間で50m以上の長さの網を手繰り寄せ、網に入った魚群を大きなタモ網で汲み上げるなど、どの作業も大勢が力を合わせなければ出来ないものでした。大型の船や網を使うようになった頃から、それぞれの作業にあわせた「うた」が出て、「鯧場の仕事は「うた」で始まって、「うた」で終わるものだ」と言われました（『鯧場物語』内田五郎著）。

大型の定置網はいつ頃から使われるようになったのでしょうか。江戸時代の文化年間（1804～1818）、釧路や根室など道東で成網と呼ばれる大型網が登場し、日本海側の鯧漁にも使われ始めました。早いところでは、弘化年間（1844～48）の増毛地方、次いで嘉永年間（1848～54）の寿都地方で使われ、その

後、余市地方でも安政年間（1854～60）の古文書に見られるようになるので、この頃が沖揚げ音頭の唄われ始めだったと思われる（『北海道の生業2』）。

もともと、行成網が使われる前にも箆網という大型のまき網類が使われ、大人数で作業していたので、箆網による作業時でも作業唄はあったかもしれません。

沖揚げ音頭は、まず一人が唄い、それに続いて他の皆が唄うものが基本です。最初の独唱を「ハオイ」、斉唱を「シタゴエ」といいます。沖の定置網との往復に船を漕ぐ時にうたうのは「船漕ぎの唄」、鯧のはいった定置網を手繰り寄せる時は「網おこしの唄」、定置網から梓網（運搬用の別の網）に魚群を落とし込む時に唄うのは「木遣り音頭」、梓網に大タモを差し入れて別の船に汲み移す時にうたうのが「ソーラン節」でした（写真）。網目に付着した魚卵を叩き落とす時には「子たたき音頭」がうたわれました。

「ハオイ」を唄うのは、作業効率を左右する大事な役目で、作業全体を見ながらテンポを変えたり、面白い歌詞を創作する頭のよい者が指名され、地域によって

ハオイ船頭という役職を与えたところもありました。

当時うたわれていたソーラン節の歌詞は、現在我々が耳にするようなものばかりでなく、「親方の悪口であったり、近所のオカミさん連中をひやかす歌詞であったり、赤面するようなもの」だったそうです（『なづきとぼんのぐとあぐど』おでこ、うなじ、かかと）。

余市町オリジナルのソーラン節の歌詞でこのっているものをいくつか記します。

「湯内よいとこ一度はござれ浜に黄金の花が咲く」（湯内は豊浜町）

「ここは湯内身は島泊灯いらすのローソク岩」（島泊は潮見町）  
「沖のローソク岩どんとうつ波は可愛い船頭衆の度胸ためし」



▲ 沖揚げ作業（奥寺漁場）

### 余市町小中学生美術書道展

展示期間 11月22日(水)～11月30日(木)  
午前9時～午後5時  
展示場所 中央公民館(2階・3階)  
授賞式 11月29日(水)  
午後3時50分(中央公民館3階)  
同時開催 北海道余市養護学校作品展  
主催 町教育委員会 ☎21-2138



### 余市町シルバー人材センターが奉仕活動を実施

10月14日(土)に公益社団法人余市町シルバー人材センター(石川賢治理事長)の皆さん20人による奉仕活動が行われました。

同センターでは毎年10月のシルバー人材センター事業普及啓発促進月間に奉仕活動を行っており、役場庁舎周辺の草刈作業や樹木の剪定作業をしていただきました。

